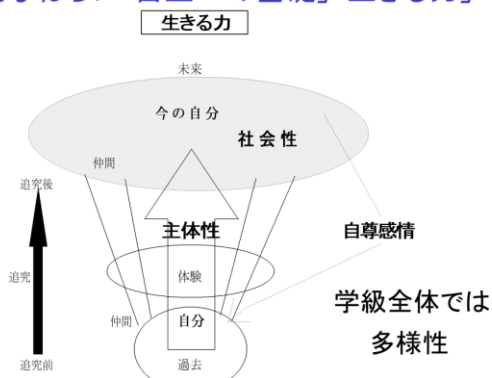




テーマ「単元で学ぶことの意味」

1 はじめに 一私の考え方ー

究極的なねらい「自立への基礎」「生きる力」



方向目標：「到達目標」ではない

「生きる力」の
中核を占める「主体性」

- ・主体性＝「問題解決」そのもの！
願う姿：子どもが自分で目標を
つくって、実現していく姿
……一生は、これの繰り返し

2 「単元」という学習の枠組みを持ち込む

「単元」という用語が、初めて用いられたのは昭和27年発行の小学校学習指導要領理科編（試案）においてであった。そこでは、「単元」を次のように定義している。

【「単元」の定義】

- ・・・自分の意志によって行動しようとする人々にとっては、日常生活の大部分が問題解決の過程の連続であるともいえる。
- ・・・この問題を自分で解決する過程を、学習の中に持ちこんで、これを全体の学習中の一つの大きな仕事にしようとするのである。この仕事は、一つのまとまりのあるものであって、これを単元と名づける。

昭和27年小学校学習指導要領
理科（試案）

単元：問題を自分で解決する過程を、学習の中にもち込んで、これを全体の学習中の一つの大きな仕事にしようとしたもの
単元の学習：一つの問題をつかんで、それを解決するまでの研究の過程

子どもの立場からとらえる

3 『単元学習』ならではの学びとは？ ～2年生活科「自分ものがたりを作ろう」～

<導入>

- T どうやって自分の名前つけられたか知っているかな？
C ……
T 土日、家で聞いておいて。
——— 土日、子供たちは、家族に自分の名前の由来を聞いてくる ———
T どうだった？
C1 家族と同じ字を使って考えたって聞いたよ。
C2 占い師に聞いて、名前を付けたって。
～～～
T 生まれてからの自分について、家族に聞いてメモをしていこう。
そして、「自分ものがたり」として本にしよう。

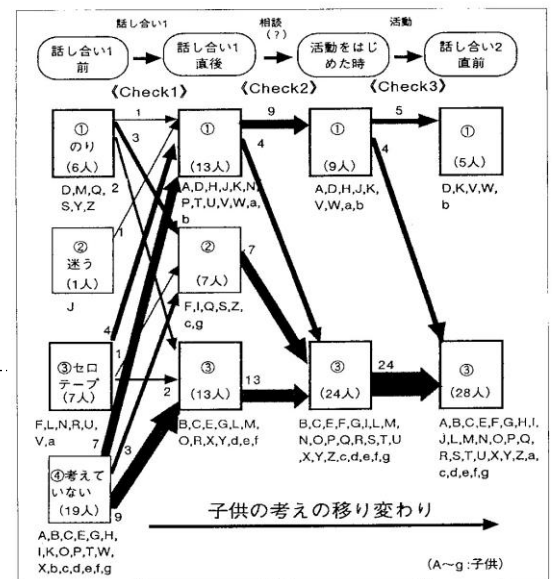
< 単元前半 >

- ・調べ方の意見交換、家族に聞き取りメモを増やす活動

< 単元後半 >

- ・集めた聞き取りメモから使うものを選ぶ、順序を考える、本の名前を考える活動
(図画工作科と合科)

- Y 児 (自宅のアルバムから写真を取り出して持ってきていた)
お母さん、「勉強終わったら、写真返してくれるんやろうね」って。
朝のうちに、先生に聞いてとお母さんに言われた。
- T なんでこんなことお母さんが言ったか、みんなはどう思う？
- C3 だって、お母さんの写真やもん。
- C4 テープで貼る(「自分ものがたり」の本に)ならいい。テープを輪にして。
糊はだめ。画用紙に切り込み入れて挟むならいい。
- C5 (C5児は、写真を「ハート型」に切っている)
私は、お母さんが「(写真を)あげる」って。
「そのかわり、お母さんになったら、自分の子に『こんなの作ったよ』と、見
せられるくらいのもので作れるように」って言われた。
- T みんなはどうする？ 手を挙げてみて。
- ・写真を糊で貼る人?・・・・・・6人
 - ・セロテープ(写真を返す)の人?・・・7人
 - ・迷っている人・・・・・・1人
 - ・まだ、考えていない人・・・・・・19人
- T セロテープの人は、本作りを進めてもいいね。
糊で貼って写真を返さない予定の人は、お
うちの人の許可を取ってからにしよう。



教師はその後、写真を貼るのは「糊」か「セロテープ」のどちらがよいかについては一切ふれず、挙手した方法から変更しても可とし、子供一人一人がよりよい「自分ものがたり」の本を作成できるように支援をした。

- Y 児 (イラストの色塗りもきれいに仕上げ、40 ページもの作品を作った。)
- T (Y 児に) これでお母さんに「写真、返して！」って言われたら、(写真に糊付けしていないから) すぐに返せるもんね。
- Y 児 (無言)
私、自分のことを考えていなかった…。
- お母さんに写真を返さなきゃって、テープで貼ったけど、写真はずして返したら、「私のものがたり」が「ごみ」になる。写真、返したくなくなった…。
- C6 本当だ。自分もお母さんに、写真を返さなくていいように頼む！
- C7 だから、お母さん、「写真、切っていいよ」って言ったんだ。

★ 単元の初めは、「ただの『画用紙』『写真』」だった。

心を込めて「自分ものがたり」の本を作り終えたら、「ただの『画用紙』『写真』」は、「自分の宝物」になった。

そのことをＹ児自身が感じられたから、「私、自分のこと考えていなかった…」と言ったのだと考えられる。

単元を通して、「心のひだ」が一つ増えた。

この単元を通して、どんなことを感じるようになってほしいか。
どんな心のひだを１つ増やしてほしいのか。

単元の
最初と最後で
どう変わるか。
「主体性」
「自己評価」と
関連

単元の初めに：母に「写真を返す」または、「返さない」の話し合い
【「くさび」を打った】

単元の最後に：「どう思う自分になったのか」

Q1 「自己評価」「教師の評価」「相互評価」生きていくにはどれが大事か？

→ 「自己評価」が一番大事になってくる。

Q 「教師の評価」は、なぜ必要か？

→ 子供が「何がよいか」分からないとき、教師が「よいこと」のものをさしを出していることがある

→ 最後は、「自己評価」が重要となる。

生きていく上で、自分で納得できることが大事。

いろいろな学習を通して、自分の「評価のものさし」が変わっていく。
「自分を見つめる視点」が変わっていく。

Q2 「評価規準」と「評価基準」はどう違うか？

→ 「評価規準」：評価の質（目標にする具体的な子供の姿として文章表現）

「評価基準」：評価の量（どの程度達成できたか、数値的なもの、A、B、C）

4 どうしても『本時主義』からぬけられない教師

◆ 2年生活科「老人ホームへ行こう」

C（行くことをためらう子供たち）

T 今の思いを書こう。 C（ノートに、「くさい」「汚い」）

T それでも老人ホームに行くよ。

C（訪問するごとに、子供たちは、高齢者との関わりを深めていった）

~~~~~

T 今、みんなはどんなことを思っていますか？最初に書いたノートを見よう。

C 恥ずかしくて、見られない。

（子供たちは、単元を通して人の温かみを感じていった）

★ 「最初に書くこと」に価値がある → 自己評価に

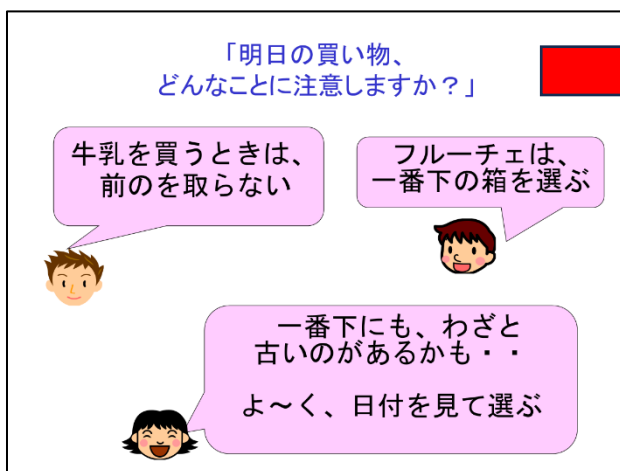
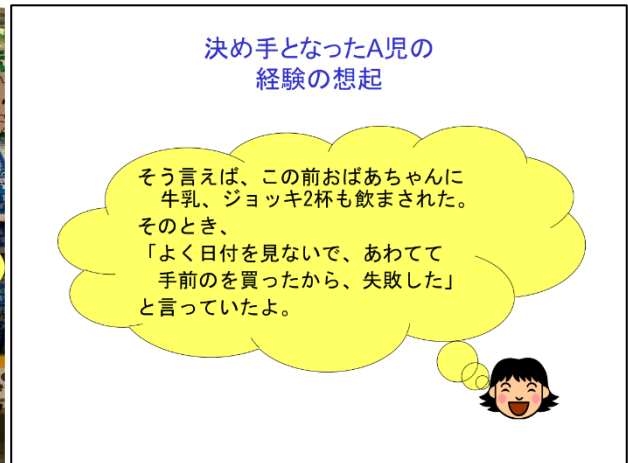
例：「入学し、一番初めに書いた字」

「3学期に書いた字」

「きれいになったな」と  
自分で自分の成長を感じられる  
「しかけ」を

## ◆ 2年生活科「かいものさくせん」

・学習のテーマ「500円でどう賢く買い物をし、みんなでパーティーをするか」



C (商品は、後ろや下から取る方が新しいからよいと、話し合っていた。)

S児 僕は、一番手前の牛乳を取ろうと思う！

T (今まで、20分ほどかけて、「陳列の後ろや下の新しい品物を選んだらよい」と話し合っていたのに、S児は何を聞いていたのか！と思いながら)

Sさんは、前のを取るんだ。(にっこり笑って)

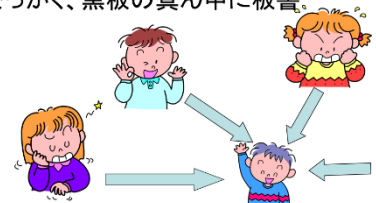
C1 どうして、前の古いのを取るの？

C2 Sさん、話し合い聞いていたの？

T Sさん、みんなはこう言っているけど、それでも一番前の牛乳取るの？

教師(松本)の対応

- 1 「Sさんは、前のを取るんだ(にっこり)」
- 2 でっかく、黒板の真ん中に板書。





### はっとさせられたS児の発言

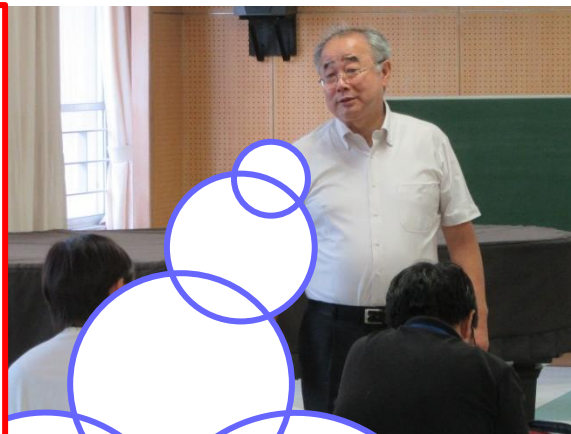
だって、買い物行く店、  
角のスーパーでしょ。

僕いつも、あの店で買い物をしているの。

あの店のおじいちゃん、  
時々まけてくれるんだよ。

それなのに、新しいものばかり取ったら、  
僕の大事なおじいちゃんがいる店、  
古いものばかりになってしまう。

明日すぐ食べるのだから、  
古いのでもいいと思う。



### 教師は、S児の発言にはっとさせられた

S児の発言にはっとさせられた。

ベテランになっている「おごり」があった。

どんな子供を育てようと思っていたのか。

S児は、いつもの店のおじいちゃんの顔を思い出して語っている。

本当は、こんな子供を育てたかったのではないのか。

「さっきまでの話合いを聞いていなかったのか！！」と言わなくてよかった。

周りの女兒に批判をすることを押し付けてしまった。

しかし、S児は、自分の思いを言い返した。

それを聞いて、「同じ値段なら、新しい方がいい」という子供も、

「S児はすごい」という子供もいた。教師は、反省した。

得することだけが、「買い物作戦」ではない。

S児は店の人のことまで考えていた。(このことをほめなければならなかった)

「売り手」「買い手」の視点しか見えていない、教師の自分がいた。

「本時のねらい」にばかり迫ろうとする自分がいた。

教師の思いと異なる児童の発言を切り捨てようとしてはならない。

一人一人の子供をしっかりと認めること。

一体、どんな子どもを  
育てたいの？  
S児みたいな子どもを  
育てたいのでは  
なかったの？

**何のための授業なの！！**

#### ★ 教師の思いと異なる児童の発言が出たときは…

(まずは、深呼吸して、心を落ち着かせて)

「どうして、そう考えたの？」と、

その子供の思いや考えを感じようとする教師の余裕、ゆとりをもって  
関わってほしい。

★ 授業最後の「まとめ」で、「内容」ばかり整理していないか？

みんなで認め合うのは、「その子供がすてき」ということ。

学習内容中心で、そのことが抜けてしまう。

違っていたとしても「がんばって発言できた友達」のことや、「その友達の考え方」をみんなで認め、「いいね」「すてき」「すごいね」と言い合えるクラスに。教師もクラスの仲間の一人として、その子供の価値をみんなで感じ合える時間を大切に。

一人一人の子供が主役。それを教師も一緒に感じられるように。

「〇〇さん、よく考えた！！」と、よさを認め、共に感じられる教師に。

一人一人違うのを、認め、価値観を感じ合える学級づくりを。

教師がまず、その姿を見せていこう。

— 子どもを信じ、子どもとともに学ぶ姿勢  
なしに、決して子どもは育たない —

